

邦訳版アカデミックセルフ・ハンディキャッピング尺度の 作成と信頼性および妥当性の検討

奥野 るりは

要旨：試験前に勉強をせずに部屋の掃除を始めてしまったり、試合前に身体の不調を訴えたりするなど、自身の評価や成績が下る場面で失敗を予期した時、それに備えて予防線を張る言動を取る行為のことを、セルフ・ハンディキャッピング（以下、SH）という。本研究では、学業場面におけるSHの尺度である Academic Self-Handicapping Scale（以下 ASHS；Urdan et al., 1998）の邦訳版作成と、尺度の信頼性および妥当性の検討を行なうことを目的とした。ASHS と関連がある尺度（SH23、本来感、優越感・有能感、セルフコントロール短縮版）と抽出された因子（SH23：「失敗への恐れ」、「切り替えの難しさ」、「楽観的な態度」、「短絡的な利益」、「自尊心の傷付き回避」、セルフコントロール短縮版：「誘惑・衝動性の抑制」、「長期的利得のための自制」）との関連を通じて妥当性の検討を行なった。SH23・本来感との間に相関がみられたが、優越感・有能感、セルフコントロールとの間に相関がみられなかったため、仮説は一部支持された形となった。また、Cronbach の α 係数によって信頼性の検討を行なったところ、 $\alpha = .75$ と一定の信頼性が示された。

仮説が一部支持されなかった理由として、概念の考察、妥当性検証のための適切な概念選択であったか、調査対象者の人数、調査対象地域の幅広さ、男女比の偏りなどが考えられるが、最も可能性が高いのは、邦訳版 ASHS の項目文章の問題であると考えられる。SH をとる状況を狭めているような表現が文頭にあることで、自身には当てはまらないと感じさせる要因になった可能性がある。そのため、学問領域の評価場面であること（テストや課題など）を教示に組み入れることで改善される可能性がある。また、日本人がとる SH と海外の SH の形態や状況などが異なる可能性がある。今後の課題として、日本の学問領域の現状にあった SH の項目を集める必要がある。

キーワード：セルフ・ハンディキャッピング、本来感、優越感・有能感、セルフコントロール

問 題

セルフ・ハンディキャッピング（Self-handicapping, 以下、SH）とは、「自分の何らかの特性が評価の対象となる可能性があり、かつそこで高い評価を受けられるかどうか確信がもてない場合、遂行を妨害するハンディキャッピングがあることを他者に主張したり、自らハンディキャッピングを作り出す行為」という（安藤, 1990）。Arkin & Baumgardner (1985) は、SH を、①ハンディキャッピングが実際に作り出されたものか（獲得的）、言語的に示されるものか（主張的）、②ハンディキャッピングが個人の内部に在るものか（内的）、外部に在るものか（外的）、③自己の評価を高めるためのものか（高揚的）、自己の評価の低下を避けるためのものか（防衛的）という三次元によって分類した。

SH は、自己と他者の両方による評価をパフォーマンスの如何にかかわらず維持することを目的とするが、その目的が達成されないこともある（Springston & Chafe, 1987；沼崎, 1995；Midgley, Arunkumar, & Urdan, 1996）。そのため、予防線を張ることで自分自身にも他者に対しても良い影響を与えることが目的であるはずの SH は、獲得的や主張的という形態にかかわらず、悪い結果をもたらす可能性がある。SH を慢性的に行なう人は、短期的には利益があるように感じられるものの、実際には努力を差し控え続けた結果、能力が向上せず、また他者か

ら否定的な感情や評価を受けることとなり、長期的には不利益を被ることとなり、不適応な状態に陥ると言える。

Arkin & Baumgardner (1985) は SH の社会心理学的実験の結果をもとに SH を分類し、この分類は後の SH の尺度生成に貢献した。Self-Handicapping Scale (以下 SHS; Jones & Rhodewalt, 1982) や、日本では沼崎・小口 (1990) が SHS を基にした邦訳版セルフ・ハンディキャッピングスケール (以下 SH 23) が主に用いられている。現状、SH の尺度は、SHS と並んで、Academic Self-Handicapping Scale (以下 ASHS; Urdan et al., 1998) が使用されている。しかし、日本国内においては ASHS の邦訳版が存在しない。本研究ではその不足を補うため、邦訳版 ASHS の作成を目的とする。

邦訳版 ASHS を作成するにあたって、セルフハンディキャッピングを測定している SH 23 だけでなく、優越感・有能感尺度、セルフコントロール短縮版尺度 (以下、SC 尺度) を取り上げて妥当性の検討を行なう。以下にその理由を述べる。

SHS や SH23 と自尊感情尺度の間に負の相関があることが認められている (Stube, 1986; Rhodewalt, 1990; 沼崎・小口, 1990)。また、近年では自尊感情は概念的な見直しが試みられており、本当の自尊感情と随伴性自尊感情、そして全般的自尊感情の 3 つがあると考えられている。伊藤・川崎・小玉 (2011) は本当の自尊感情と随伴性自尊感情の指標として、前者を“本来感”、後者を“優越感”として取り上げて検討した結果、全般的自尊感情のなかに本来感と優越感が含まれていることが明らかとなった。SHS や SH23 が妥当性検証のために使用した Rosenberg (1965) の自尊感情尺度は概念的な見直しをされる前の尺度であったため、本来感尺度を使用した方がより適切な検討ができると考えられる。また、随伴性自尊感情は外的な物事に随伴している自尊感情である。そのため、随伴性自尊感情が高い者は外的な評価によって影響を受けやすいため、SH 行動を起こしやすいと考えられる。本研究では伊藤・川崎・小玉 (2011) に基づき、本当の自尊感情と随伴性自尊感情の指標として、本来感と優越感を取り上げ、妥当性の検討を行なう。

また、SC 尺度を取り上げる理由として、セルフコントロール (Self-control, 以下 SC) は、自尊心、自信のなさ、性別、社会的望ましさに関係なく、SHS・主張的 SH・獲得的 SH の形態を確実に予測することが明らかとなっている (Uysal and Knee, 2012)。SC の検討を行うことで、邦訳版 ASHS の妥当性が上がると考えられる。また、明らかに SH を採用している人物に対して否定的な感情を持ち、長期的には能力が低いと判断することが明らかになっている (沼崎, 1995)。そのため、SH は自己呈示であるにもかかわらず他者への自己評価を下げてしまう可能性がある。SH 傾向がある者は、他者からあまりよく思われなことをわかっていても SH をとってしまう状態、つまり SC できていない状態にあるのではないかと考えられる。

以上により、本研究では、邦訳版 ASHS を作成するとともに、妥当性と信頼の検討を行ない、SH と他概念との検討を行なう。

具体的には、Urdan et al. (1998) の ASHS を邦訳し、妥当性 (理論的に関連がある尺度との相関関係を通して) と信頼性 (内的一貫性を通して) の検討を行なうことを目的とする。妥当性の検討には、SH23 尺度、本来感尺度、優越感・有能感尺度、SC 尺度を用いる。(1) SH23 と ASHS は正の相関である、(2) 本来感と負の相関である、(3) 優越感・有能感と正の相関である、(4) SC と負の相関である、以上を本研究の仮説とする。また、信頼性は Cronbach の α 係数を求めて内的一貫性による方法で検討する。また、各尺度から得られた因子から各概念との関連を検討する。ASHS と関連のある概念との検討を探索的に行なうことで、改めて SH の概念を検討したい。

方 法

1. 調査項目の作成

Urdan et al. (1998) により作成された ASHS 邦訳版の作成にあたり、原著者らに許諾を得た後、原文の意味を損なわないように尺度を翻訳した。その後、作成した日本語訳を英語ネイティブスピーカーに英訳を依頼し、原文・日本語訳・再翻訳英文を、留学経験者と共に意味的相違がないことを確認した。翻訳元の ASHS にならない、回答には 5 件法 (1 まったく当てはまらない~5 非常に当てはまる) を用いた。

2. 調査内容

①邦訳版 ASHS (10 項目, 5 件法), ②沼崎・小口 (1990) の SH23 (23 項目, 6 件法), ③伊藤・小玉 (2005) の本来感尺度 (9 項目, 5 件法), ④小塩 (2004) の自己愛人格目録短縮版の下位概念である優越感・有能感尺度 (10 項目, 5 件法), ⑤尾崎ら (2016) のセルフコントロール尺度短縮版 (13 項目, 5 件法), ⑥フェイスシート (性別, 年齢) を用いた。

3. 調査参加者と手続き

ASHS は学業の SH を測る尺度であるため, 共学に在籍する大学生を対象にした。インターネット上で調査を実施したところ, 179 名の回答を得た。このうち, 年齢の外れ値 (42 歳と回答した 1 名) を除いたものを有効回答とした (Table 1)。全体での年齢の平均 = 20.30, $SD = 1.37$, 男性において, 年齢の平均 = 20.53, $SD = 1.69$, 女性において, 年齢の平均 = 20.17, $SD = 1.14$ あった。

所属する教員へ協力を依頼し, オンラインでの調査を行なった。大学ごとに作成したアンケートページを各大学の教員から学生に対して紹介してもらい, 調査協力の呼びかけを行なった。

4. 倫理的配慮

調査について, ①授業とは独立した評価であり, 参加の有無によって授業評価に影響を及ぼさない事, ②参加は自由意志であり, 参加の有無は教員へは知らされないこと, ③データは暗号化して保存し, 研究遂行又は問い合わせがあった際のために 5 年間保管し, その後破棄することを伝えたくて行なった。アンケートのリンクへ飛んだ際は, 冒頭ページに研究への同意文面を記載した。読んだうえで調査協力を同意した学生に対して調査を行なった。

結 果

第 1 節 邦訳版 ASHS の項目分析

邦訳版 ASHS の項目を分析し, 尺度の信頼性・構造を検討する。

Table 2-1 から 2-6 に邦訳版 ASHS の項目ごとの度数分布, Table 3 に邦訳版 ASHS の項目ごとの要約統計量を示す。

邦訳版 ASHS 6 項目について得点分布を確認したところ, 項目 5 以外すべてに床効果が見られた。床効果の影響を確認したが, 引き続き詳細な分析が必要であると考えられるため, 分析を続行した。Table 2-1 から 2-6 でも分布の偏りが見られたが, 引き続き詳細な分析をした上で項目の精査をすることにした。

邦訳版 ASHS の因子構造を確認するため, 因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行った結果, Urdan et al.,

Table 1 研究協力者の年齢における人数 (() 内は標準偏差)

	全体 (n=178)	男性 (n=66)	女性 (n=112)
年齢			
18 歳	12 (6.7)	6 (3.4)	6 (3.4)
19 歳	39 (21.9)	11 (6.2)	28 (15.7)
20 歳	56 (31.5)	20 (11.2)	36 (20.2)
21 歳	40 (22.5)	14 (7.9)	26 (14.6)
22 歳	23 (12.9)	8 (4.5)	15 (8.43)
23 歳	4 (2.2)	3 (1.7)	1 (0.56)
24 歳	3 (1.7)	3 (1.7)	-
27 歳	1 (0.6)	1 (0.6)	-

Table 2-1 邦訳版 ASHS 項目 1 の度数分布表

項目 1 学校の課題が上手くいかなかったときの言い訳にできるように, わざとその課題をギリギリまでしないことがある

評定	人数	確率 (%)	累積確率
1	79	44.38	44.38
2	65	36.52	80.90
3	15	8.43	89.33
4	16	8.99	98.31
5	3	1.69	100.00
合計	178	100	

Table 2-2 邦訳版 ASHS 項目 2 の度数分布表

項目 2 学校の課題が上手くいかなかったときに「友達が邪魔をしたからだ」と言い訳できるように, 授業中に友達がちょっかいをかけてきたり, 宿題の邪魔をしてきたとしてもわざと特に何も言わないことがある

評定	人数	確率 (%)	累積確率
1	111	62.36	62.36
2	52	29.21	91.57
3	9	5.06	96.63
4	4	2.25	98.88
5	2	1.12	100.00
合計	178	100	

Table 2-3 邦訳版 ASHS 項目 3 の度数分布表

項目 3 学校の課題が上手くいかなかったときに「頑張らなかったからだ」と言い訳できるように、わざと頑張らないことがある

出現値	度数	確率 (%)	累積確率
1	70	39.33	39.33
2	66	37.08	76.40
3	16	8.99	85.39
4	20	11.24	96.63
5	6	3.37	100.00
合計	178	100	

Table 2-5 邦訳版 ASHS 項目 5 の度数分布表

項目 5 テストが上手くいかなかったときに「前日の晩にサボっていたからだ」と言い訳できるように、実際にテストの前日の晩にわざとサボることがある

出現値	度数	確率 (%)	累積確率
1	101	56.74	56.74
2	48	26.97	83.71
3	10	5.62	89.33
4	16	8.99	98.31
5	3	1.69	100.00
合計	178	100	

Table 3 邦訳版 ASHS の項目ごとの要約統計量

	平均値	中央値	標準偏差
項目 1	1.87	2.00	1.01
項目 2	1.51	1.00	0.79
項目 3	2.02	2.00	1.11
項目 4	1.91	2.00	1.05
項目 5	1.72	1.00	1.03
項目 6	2.31	2.00	1.25

Table 2-4 邦訳版 ASHS 項目 4 の度数分布表

項目 4 思っていたより学校の課題が上手くいかなかったときに「課題以外の事に手を出していたからだ」と言い訳できるように、わざと沢山の事に手を出すことがある

出現値	度数	確率 (%)	累積確率
1	79	44.38	44.38
2	61	34.27	78.65
3	16	8.99	87.64
4	19	10.67	98.31
5	3	1.69	100.00
合計	178	100	

Table 2-6 邦訳版 ASHS 項目 6 の度数分布表

項目 6 学校の課題が上手くいかなかったときの言い訳できるように、勉強ができない理由（気分が悪い、家の手伝い、兄弟の世話など）を探ることがある

出現値	度数	確率 (%)	累積確率
1	64	35.96	35.96
2	46	25.84	61.80
3	20	11.24	73.03
4	44	24.72	97.75
5	4	2.25	100.00
合計	178	100	

(1998) と同様の 1 因子構造が再現確認された (Table 4)。各項目の因子負荷量と共通性を確認すると、項目 2 において低い値であった。項目 2 を含めた 6 項目の α 係数は .75 であり、除いた 5 項目での α 係数は .76 であり、わずかながら内的整合性が高まることが分かった。また、Table 2-2 でも回答分布の偏りが大きく、Table 3 のように床効果も見られたことから、総合的に判断し、項目 2 を除く 5 項目を邦訳版 ASHS として採択することにした (Table 5)

Table 4 邦訳版 ASHS の因子分析結果

		因子負荷量	共通性
3	学校の課題が上手くいかなかったときに「頑張らなかったからだ」と言い訳できるように、わざと頑張らないことがある	.81	.66
5	テストが上手くいかなかったときに「前日の晩にサボっていたからだ」と言い訳できるように、実際にテストの前日の晩にわざとサボることがある	.73	.54
4	思っていたより学校の課題が上手くいかなかったときに「課題以外の事に手を出していたからだ」と言い訳できるように、わざと沢山の事に手を出すことがある	.72	.52
6	学校の課題が上手くいかなかったときの言い訳できるように、勉強ができない理由（気分が悪い、家の手伝い、兄弟の世話など）を探ることがある	.54	.29
1	学校の課題が上手くいかなかったときの言い訳にできるように、わざとその課題をギリギリまでしないことがある	.35	.12
2	学校の課題が上手くいかなかったときに「友達が邪魔をしたからだ」と言い訳できるように、授業中に友達が邪魔をしてきたり、宿題の邪魔をしてきたとしてもわざと特に何も言わないことがある	.27	.07

Table 5 邦訳版 ASHS (5 項目) の要約統計量

	平均値	中央値	標準偏差
全体	9.84	9.00	3.92
男性	10.15	10	4.04
女性	9.65	9	3.86

Table 6 ASHS と「やらない」-「やれない」因子の相関係数

		SH 23 合計	やれない	やらない
ASHS	全体	.33**	.17*	.34**
	男性	.53**	.27*	.51**
	女性	.25**	.13	.26**

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

第 2 節 邦訳版 ASHS の妥当性の検討

1. SH23 との関連

(1) SH23 「やらない」-「やれない」因子との関連

ASHS と沼崎・小口 (1990) の先行研究で抽出された SH23 の「やれない」因子と「やらない」因子と相関分析を行なった (Table 6)。全体において SH23 合計得点と正の相関 ($r = .33, p < .01$)、「やれない」と弱い正の相関 ($r = .17, p < .05$)、「やらない」と正の相関 ($r = .34, p < .01$) と、すべてにおいて正の相関がみられた。

男性においても SH23 合計得点と正の相関 ($r = .53, p < .01$)、「やれない」と弱い正の相関 ($r = .27, p < .05$)、「やらない」と正の相関 ($r = .51, p < .01$) と、すべてにおいて正の相関がみられた。

女性において、SH23 合計得点と正の相関 ($r = .25, p < .01$)、「やらない」と正の相関 ($r = .26, p < .01$) がみられた。「やれない」とは無相関であった。

(2) 本研究で得られた SH23 の因子との関連

まず、SH23 尺度 23 項目について得点分布を確認したところ、天井効果および床効果がみられなかったため、すべての質問項目を分析対象とした。SH23 尺度の因子構造を確認したところ、固有値と乱数による相関行列の固有値の推移が交わった箇所が 5 因子であったため、5 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 5 因子を仮定して、最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行なった。因子負荷量が .30 未満の項目 (項目 6, 項目 13) を除外し、再度最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行なったところ、因子負荷量が 1.00 を超える項目が表れた為、最小二乗法・プロマックス回転による探索的因子分析を行なった。しかし、項目が少ない因子があるため、適合度の高さや項目数の多さから 23 項目すべてを用いた 5 因子を採択した (Table 7)。第 1 因子は 7 項目で構成されており、失敗をしないように取り組む様子や失敗を受け入れられない様子を意味する項目が高い負荷量を示していたことから「失敗への恐れ」因子と命名した。第 2 因子は 4 項目で構成されており、負の感情が持続されていることを意味する項目が高い負荷量を示していたことから「切り替えの難しさ」因子と命名した。第 3 因子は 5 項目で構成されており、課題などの目標に対する姿勢を意味する項目が高い負荷量を示していたことから「楽観的な態度」因子と命名した。第 4 因子は 3 項目で構成されており、長期的な努力を回避したり、目の前の欲を満たしていることを意味する項目が高い負荷量を示していたことから「短期的な利益」因子と命名した。第 5 因子は 4 項目で構成されており、傷つかないように行動したり、原因帰属をしている様子を意味する項目が高い負荷量を示していたことから「自尊心の傷付き回避」因子と命名した。内的一貫性は低かったが ($\alpha = .44 \sim .68$)、作成された時点から内的一貫性の低さが示唆されている SH23 尺度の特性上のものであるとし、本研究ではこれらを下位尺度として採用することとした。

ASHS と本研究で抽出された SH23 の「失敗への恐れ」因子・「切り替えの難しさ」因子・「楽観的な態度」因子・「短期的な利益」因子・「自尊心の傷付き回避」因子と相関分析を行なった (Table 8)。全体において、「失敗への恐れ」と正の相関 ($r = .37, p < .01$)、「切り替えの難しさ」と弱い正の相関 ($r = .16, p < .05$)、「楽観的な態度」と弱い正の相関 ($r = .24, p < .01$)、「自尊心の傷付き回避」と弱い正の相関 ($r = .14, p < .10$) がみられた。「短期的な利益」とは無相関であった。

男性において、「失敗への恐れ」と正の相関 ($r = .47, p < .01$)、「切り替えの難しさ」と正の相関 ($r = .34, p < .01$)、「楽観的な態度」と正の相関 ($r = .40, p < .01$)、「自尊心の傷付き回避」と正の相関 ($r = .25, p < .05$) がみられた。「短期的な利益」とは無相関であった。

女性において、「失敗への恐れ」と正の相関 ($r = .33, p < .01$) がみられたが、他因子との間は無相関であった。

Table 7 SH23 尺度の因子分析結果 (最尤法・プロマックス回転後の因子パターン)

	I	II	III	IV	V	
第 1 因子：失敗への恐れ ($\alpha=.68$)						
3. 試験を受ける時、十分過ぎるほど準備をしてしまう (R)	-.68	.23	.57	.15	.04	
17. 他人の期待にこたえられない時、理由づけしようとする	.63	.13	.21	-.08	.20	
1. 失敗すると、すぐ状況のせいにしたくなる	.57	-.07	.40	.11	.11	
19. 重要なことがある前には、明瞭に考えたり、適切なことをする能力を妨げるようなものは飲まない (R)	-.39	.04	.21	.05	-.12	
22. 非常に落ち込んでしまい、簡単なことさえなかなかできなくなってしまうことが時々ある	.37	.32	-.04	.25	.01	
8. 本を読むとすると時、物音や空想で集中できなくなりやすい	.34	.15	-.08	.03	-.16	
13. いつの日か完璧になれたらと思う	.28	.17	-.12	.23	.08	
第 2 因子：切り替えの難しさ ($\alpha=.66$)						
23. 気分転換が早くできる方である (R)	.05	.76	-.20	-.25	-.24	
4. 人より体調が悪いことが多い	-.06	.51	-.05	.06	-.01	
15. 感情に邪魔されなければ、もっとうまくできるのと思う	.08	.46	-.20	.20	.25	
21. 生活のある場面での悩みや不安を、他の場面には持ち込まない (R)	.41	.43	.21	-.12	-.15	
第 3 因子：楽観的な態度 ($\alpha=.55$)						
5. どんなことでも、いつもベストを尽くす (R)	-.09	.06	.70	-.15	.16	
12. 何事もベストでのぞめないのはいやだ (R)	.16	-.23	.63	-.07	.01	
2. ぎりぎりまで物事を先にのばすほうである	.01	-.14	.51	.32	.00	
7. 試験の前にはとても不安になる	.14	.28	-.31	.10	.04	
6. 重要な活動などには、そのために必要な準備や経験が自分にあることを確かめてから参加する (R)	.01	.03	.26	.10	-.16	
第 4 因子：短期的な利益 ($\alpha=.44$)						
10. 自分をもっと努力すれば、もっとうまく出来るのと思う	-.07	-.05	-.08	.60	.10	
20. 食べすぎたり飲みすぎたりすることがよくある	.21	.06	.16	.58	-.23	
11. いつ手に入るかどうかかわからない未来の大きな楽しみより現在の小さな楽しみ方を選ぶ	-.15	.05	.21	.31	.10	
第 5 因子：自尊心の傷付き回避 ($\alpha=.46$)						
9. 人に負けたりうまくいかなくなったりしても、余り傷つかないように、人とは張り合わないことにしている	.10	.05	.04	-.19	.63	
18. スポーツやテストをする時、運が悪い方だと思う	.04	.31	-.10	.04	.35	
16. 何かうまくできない時、他のことはうまくできると自分を元気づけることがよくある	.02	-.10	-.01	.09	.32	
14. 1日か2日の軽い病気なら、時には病気であることを楽しんでしまうこともある	.03	-.09	0.77	.06	.31	
注) 最尤法・プロマックス回転	因子間相関	I	II	III	IV	V
注) R は逆転項目	I	-	.50	.01	.12	.18
	II		-	.18	.17	.22
	III			-	-.07	.12
	IV				-	.16
	V					-

Table 8 ASHS と SH23 で得られた 5 因子との相関係数

	失敗への恐れ	切り替えの難しさ	楽観的な態度	短期的な利益	自尊心の傷付き回避
ASHS 全体	.37**	.16*	.24**	.04	.14 ⁺
男性	.47**	.34**	.40**	.01	.25*
女性	.33**	.08	.15	.06	.09

2. 本来感との関連

本来感尺度 7 項目について、得点分布を確認したところ、天井効果および床効果がみられなかったため、すべての質問項目を分析対象とした。因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行なったところ、先行研究と同じ、1 因子構造が確認された。 α 係数は .86 であった。

ASHS と本来感の相関分析を行なった (Table 9)。全体において、弱い負の相関 ($r = -.20, p < .01$)、男性において弱い負の相関 ($r = -.21, p < .10$)、女性において弱い負の相関 ($r = -.20, p < .05$) がみられた。

Table 9 ASHS と本来感との相関係数

	本来感
ASHS 全体	-.20**
男性	-.21 ⁺
女性	-.20*

3. 優越感・有能感尺度との関連

優越感・有能感尺度 10 項目について、得点分布を確認したところ、天井効果および床効果がみられなかったため、すべての質問項目を分析対象とした。因子分析（最尤法・プロマックス回転）の結果、先行研究と同様の 1 因子構造が確認された。α 係数は .91 であった。

ASHS と優越感・有能感と相関分析を行なったところ（Table 10）、すべてにおいて相関がみられなかった。

Table 10 ASHS と優越感・有能感との相関係数

		優越感・有能感
ASHS	全体	-.07
	男性	-.13
	女性	-.04

4. SC との関連

セルフコントロール尺度短縮版 13 項目の得点分布を確認したところ、項目 5 では天井効果、項目 2 と項目 13 では床効果がみられたため、これらを除外した 10 項目を分析対象とした。因子構造を確認したところ、固有値と、乱数による相関行列の固有値の推移が交わった箇所が 2 因子であったため、2 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 2 因子を仮定して、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行なった。因子負荷量が .30 未満の項目 9 を除外し、再度最尤法・プロマックス回転による因子分析を行なった（Table 11）。第 1 因子は 6 項目で構成されており、良くないと分かっているにもかかわらず止められない・やめられないことを意味する項目が高い負荷量を示していたことから「誘惑・衝動性の抑制」因子と命名した。第 2 因子は 3 項目で構成されており、長い目で見てメリットをとる方略を意味する項目が高い負荷量を示していたことから「長期的利得のための自制」因子と命名した。

ASHS と本研究で抽出された SC の「誘惑・衝動性の抑制」因子・「長期的利得のための自制」因子と相関分析を行なった（Table 12）。全体において、「誘惑・衝動性の抑制」と弱い負の相関がみられ（ $r = -.13, p < .10$ ）、「長期的利得のための自制」とは無相関であった。

男性において、「誘惑・衝動性の抑制」と負の相関がみられ（ $r = -.36, p < .01$ ）、「長期的利得のための自制」とは無相関であった。

女性において、「誘惑・衝動性の抑制」、「長期的利得のための自制」のいずれも無相関であった。

Table 11 セルフコントロール尺度短縮版の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

	I	II
第 1 因子：誘惑・衝動性の抑制（α = .69）		
11. よくないことと知りつつ、やめられない時がある（R）	.78	-.19
1. 悪いクセをやめられない（R）	.63	.50
6. もっと自制心があればよいのと思う（R）	.42	.19
3. 場にそぐわないことを言ってしまう（R）	.40	.06
4. 自分にとってよくないことでも、楽しければやってしまう（R）	.37	.10
12. 他にどのような方法があるか、よく考えずに行動してしまう（R）	.35	.22
第 2 因子：長期的利得のための自制（α = .64）		
8. 自分に厳しい人だと言われる	-.13	.81
10. 先のことを考えて、計画的に行動する	.12	.60
7. 誘惑に負けない	.18	.40
注) 最尤法・プロマックス回転	因子間相関	I II
注) R は逆転項目	I	- .38
	II	-

Table 12 ASHS とセルフコントロールとの相関係数

		誘惑・衝動性の抑制	長期的利得のための自制
ASHS	全体	-.13 ⁺	-.07
	男性	-.36 ^{**}	-.13
	女性	.02	-.07

考 察

本研究では、ASHS の妥当性および信頼性の検討を行なうことを目的とした。ASHS と関連がある尺度 (SH 23, 本来感, 優越感・有能感尺度, SC 尺度) と抽出された因子 (SH23:「失敗への恐れ」,「切り替えの難しさ」,「楽観的な態度」,「短絡的な利益」,「自尊心の傷付き回避」,セルフコントロール短縮版:「誘惑・衝動性の抑制」,「長期的利得のための自制」) との関連を通じて妥当性の検討を行なった。によって妥当性の検討を行なったところ, SH23・本来感との間に相関がみられたことで一部仮説が支持された。Cronbach α 係数によって信頼性の検討を行なったところ, $\alpha = .75$ と一定の信頼性が示された。

今回, 関連があると考えられる概念を用いて妥当性の検討を行なったが, 優越感・有能感, SC との間に相関がなく, 取束的妥当性が低いという結果であった。関連がなかった理由は, 概念の考察, 妥当性検証のための適切な概念選択であったか, 調査対象者の人数, 調査対象地域の幅広さ, 男女比の偏りなど様々述べてきたが, 最も可能性が高いのは, 邦訳版 ASHS の項目文章の問題であると考えられる。SH をとる状況を狭めているような表現が文頭にあることで, 自身には当てはまらないと感じさせる要因になった可能性がある。そのため, 学問領域の評価場面であること (テストや課題など) を教示に組み入れることで改善される可能性がある。また, 本研究では Urdan et al., (2001) が作成した ASHS の原文をそのまま邦訳した形となったが, 日本人がとる SH と海外の SH の形態やシチュエーションなどが異なる可能性がある。米国などの個人主義的な文化では, 良い成果をあげることが強調されて評価され, 韓国やロシアなどの集団主義的な文化では否定的な結果の回避が強調されて評価される (Elliot, Chirkoc, Kim & Sheldon, 2001)。これらに基づいて, 集団的文化において SH がより積極的に見られると Schwinger et al., (2014) は推察していたが, 実際はメタ分析の結果, それらの結果は見られなかった。民族の差で SH の量に差があるのではなく, SH の種類に違いがある可能性がある。今後の課題として, 日本の学問領域の現状にあった SH の項目を集める必要があるだろう。

引用文献

- 安藤清志 (1990). 自己開示 中村陽吉 (編)「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会 Pp.143-198.
- Arkin, R. M., & Baumgardner, A. H. (1985). Self-handicapping. In J. H. Harvey & G. Weary (Eds.), *Attribution: Basic issues and applications*. New York: Academic Press. Pp.169-202.
- Elliot, A. J., Chirkov, V. I., Kim, Y., & Sheldon, K. M. (2001). Across-cultural analysis of avoidance (relative to approach) personal goals. *Psychological Science*, 12, 505-510.
- Hirt, E. R., McCrea, S. M., & Kimble, C. E. (2000). Public self-focus and sex differences in behavioral self-handicapping: Does increasing self-threat still make it "just a man's game?" *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 1131-1141.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85
- 伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博 (2011). 自尊感情の 3 様態 - 自尊源の随伴性と充足感からの整理 - 心理学研究, 81, 560-568.
- 伊藤拓・上里一郎 (2002). ネガティブな反すうとうつ状態の関連性についての予測的研究 カウンセリング研究, 35, 40-46.
- Jones, E. E., & Rhodewalt, F. (1982). *The self-handicapping scale*. Princeton, NJ: Princeton University.
- McCrea, S. M., Hirt, E. R., & Milner, B. J. (2008 a). She works hard for the money: Valuing effort underlies gender differences in behavioral self-handicapping. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 292-311.
- Midgley, C., Arunkumar, R., & Urdan, T. C. (1996). "If I don't do well tomorrow, there's a reason": Predictors of adolescents' use of academic self-handicapping strategies. *Journal of Educational Psychology*, 88, 423-434.
- 沼崎誠・小口孝司 (1990). 大学生のセルフ・ハンディキャッピングの 2 次元 社会心理学研究, 5, 42-49.
- 沼崎誠 (1995). 受け手が抱く印象に獲得的および主張的セルフ・ハンディキャッピングが与える影響 実験社会心理学研究, 35, 14-22.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版.
- 尾崎由佳・後藤崇志・小林麻衣・沓澤岳 (2016). セルフコントロール尺度短縮版の邦訳および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 87, 144-154.
- Pravavessis, H., & Grove, J. R., (1998). Self-handicapping and self-esteem. *Journal of Applied Psychology* 10: 175-184.
- Raskin, R. N., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.

- Rhodewalt, F. (1990). Self-handicappers : Individual differences in the preference for anticipatory, self-protective act. IN R. L., Higgins, C. R. Snyder, & S. Berglas (Eds.), *Self-handicapping : The paradox that isn't*. New York : Plenum. Pp.59-106.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.
- Schwinger, M., Wirthwein, L., Lemmer, G., & Steinmayr, R. (2014). Academic Self-Handicapping and Achievement : A Meta-Analysis. *Journal of Educational Psychology*, 106, 3
- Springston, F. J., & Chafe, P. M (1987). Impressions of fictional protagonists exhibiting self-handicapping behaviors. Paper presented at the meeting of the Canadian Psychological Association Vancouver, B. C.
- Tice, D. M. (1991). Esteem protection of enhancement? Self-handicapping motives and attributions differ by trait self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 711-725.
- Urban, T., Midgley, C., & Anderman, E, M (1998). The role of classroom goal structure in students' use of self-handicapping strategies. *American Educational Research Journal*, 35, 101-122.
- Urban, T & Midgley, C (2001). Academic Self-Handicapping : What We Know, What More There is to Learn. *Educational Psychology Review*, 13, 2, 115-138.
- Uysal, A., & Knee, C. R. (2012). Low trait self-control predicts self-handicapping. *Journal of Personality*, 80, 59-79.